

# 日蓮大聖人御書全集

なんじょうひょうえしちろうどのごしよ

南条兵衛七郎殿御書

新版  
1824  
ゝ  
1831

なんじようひようえしちろうどのごしよ

# 南条兵衛七郎殿御書

ぶんえいがんねん

がつ にち

さい

なんじようひようえしちろう

文永元年('64)

12月13日

43歳

南条兵衛七郎

ごしよろう

よしうけたまわ

そうろう

真

そうろう

せけん

御所勞の由 承り候は、まことにてや候らん。世間

さだ

やまい

ひと とど

そうら

の定めなきことは、病なき人も留まりがたきことに候え

やまい

ひと もう

こころ

ば、まして病あらん人は申すにおよばず。ただし、心あ

ひと

ごせ

おも

定

そうら

ごせ

らん人は、後世をこそ思いさだむべきにて候え。また後世

おも

さだ

わたくし

叶

そうろう

いっさい

を思い定めんことは、私にはかないがたく候。一切

しゅじよう

ほんし

しやくそん

おし

もと

衆生の本師にてまします釈尊の教えこそ、本にはなり

そうろう

候べけれ。

しかるに、ほとけ おし 仏の教え、区々 またまちまちなり。ひと 人の心の不定  
なるゆえか。

しかれども、しやくそん 釈尊の説教、せつきよう 五十年にはすぎず。ごじゆうねん さき

しじゆうよねん 四十余年の間の法門に、あいだ 華嚴経には「心、ほうもん 仏および衆生、けこんぎよう

みつ この三つは差別無し」、さべつな 阿含経には「苦・空・無常・無我」、あごんぎよう

だいじつきよう 大集経は「染浄融通」、ぜんじようゆうずう 小品経には「混同して無二なり」、だいほんぎよう

そうかんぎよう 双観経・観経・阿弥陀経等には「極楽に往生す」。これ  
かんぎよう あみだきようとう

せつきよう らの説教は、しょうほう みな正法・像法・末法の一切衆生をすくわ  
しやうほう ぞうほう まつほう いつさいしゆじよう 救

説 んがためにこそとかれはんべり候いけめ。  
そうら

ほとけ

思

むりようぎきよう

ほうべんりき

しかれども、仏いかながおぼしけん、無量義経に「方便力

しじゅうよねん

しんじつ

あらわ

説

をもつて、四十余年にはいまだ真実を顕さず」ととかれて、

さきしじゅうよねん

おうじようごくらくとう

いつさいきよう

おや

せんぱん

悔

先四十余年の往生極楽等の一切経は親の先判のごとくく

返

いかえされて、「無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐるとも、

つい むじゅおぼだい

じよう

え

言

切

たま

終に無上菩提を成ずることを得ず」といいきらせ給いて、

ほけきよう

ほうべんぼん

かさ

しようじき

ほうべん

す

法華経の方便品に、重ねて「正直に方便を捨てて、ただ

むじようどう

と

説

たま

ほうべん

捨

説

無上道を説くのみ」ととかせ給えり。方便をすてよととか

しじゅうよねん

ねんぶつとう

捨

説

れてはんべるは、四十余年の念仏等をすてよととかれて

そうつろう

候。

確

悔

返

じつぎ

定

せそん

こうたしかにくいかえして、実義をさだむるには、「世尊

ほうひさ

のち

かなら

まさ

しんじつ

と

ひさ

は法久しくして後、要ず当に真実を説きたもうべし」「久し

よう

もく

つと

すみ

と

とう

定

くこの要を黙して、務めて速やかには説かず」等とさだめ

たほうぶつだいち

湧

出

たま

られしかば、多宝仏大地よりわきいでさせ給いて「このこ

しんじつ

しようみよう

加

じつぼう

しよぶつはつぼう

集

と真実なり」と証明をくわえ、十方の諸仏八方にあつま

こうちようぜつそう

だいぼんてんぐう

付

たま

にしよさんえ

りて広長舌相を大梵天宮につけさせ給いき。二処三会、

にかいはちばん

しゆじよう

いちにん

見そうら

二界八番の衆生、一人もなくこれをみ候いき。

もん

見そうろう

ぶつきよう

しん

あくにん

げどう

これらの文をみ候に、仏教を信ぜぬ悪人・外道はさて

そうら

ぶつきよう

なか

い

そうら

にぜんごんきよう

ねんぶつ

おき候いぬ、仏教の中に入り候いても、爾前権教の念仏

とう あつ しん じつぺん ひやつぺん せんべん いちまんないしろくまんとう いちにち  
等を厚く信じて、十遍・百遍・千遍、一万乃至六万等を一日

励

じゅうねんにじゅうねん

なんみょうほうれんげきよう

にはげみて、十年二十年のあいだにも南無妙法蓮華經と

いっぺん

もう

ひとびと

せんぱん

つ

ごはん

用

もの

一遍だにも申さぬ人々は、先判に付いて後判をもちいぬ者

そうろう

ぶっせつ

しん

わ

にては候まじきか。これらは、仏説を信じたりげには我が

み

ひと

おも

そうら

ぶっせつ

身も人も思いたりげに候えども、仏説のごとくならば、

ふこう

もの

不孝の者なり。

ゆえ

ほけきよう

だいに

い

いま

さんがい

みな

わ

故に、法華經の第二に云わく「今この三界は、皆これ我が

う

なか

しゅじよう

わ

こ

有なり。その中の衆生は、ことごとくこれ吾が子なり。し

いま

ところ

もろもろ

げんなんおお

われいちにん

よ

かるに今この処は、諸の患難多し。ただ我一人のみ、能

くど

きようしよう

しんじゅ

とううんぬん

く救護をなす。また教詔すといえども、信受せず」等云々。

もん

こころ

しやかによらい

われ

しゅじよう

おや

し

しゅ

この文の心は、釈迦如来は我ら衆生には親なり師なり主

われ

しゅじよう

あみだぶつ

やくしぶつとう

しゅ

なり。我ら衆生のためには、阿弥陀仏・薬師仏等は、主に

おや し

さんとく

てはましませども、親と師とにはましまさず。ひとり三徳を

兼

おん

深

ほとけ

しやかいちぶつ

限

おや

かねて恩ふかき仏は、釈迦一仏にかぎりたてまつる。親も

おや

しやくそん

おや

し し

しゅ

しゅ

親にこそよれ、釈尊ほどの親、師も師にこそよれ、主も主

しやくそん

し しゅ

有

難

にこそよれ、釈尊ほどの師・主はありがたくこそはべれ。

おや

し

しゅ

おお

背

者

てんじんちぎ

捨

この親と師と主との仰せをそむかんもの、天神地祇にすて

ふこうだいいち

もの

ゆえ

られたてまつらざらんや。不孝第一の者なり。故に、「また

きようしよう

しんじゆ

とう と

教詔すといえども、信受せず」等と説かれたり。たとい、

にぜん

きよう

付

たま

ひやくせんまんおくこうぎよう

たも

爾前の経につかせ給いて百千万億劫行ぜさせ給うとも、

ほけきよう

いっぺん

なんみようほうれんげきよう

もう

たま

ふこう

法華経を一遍も南無妙法蓮華経と申させ給わずば、不孝の

ひと

ゆえ

さんぜじつぼう

しようしゆ

捨

てんじんちぎ

人たる故に、三世十方の聖衆にもすてられ、天神地祇にも

怨

たま

いち

あだまれ給わんかへこれ一。

ごぎやくじゆうあく

むりよう

あく

造

ひと

こん

り

たとい五逆十悪・無量の悪をつくれる人も、根だにも利

とくどう

だいはだつた

おうくつまらとう

なれば、得道なることこれあり。提婆達多・鵞崛摩羅等こ

こんどん

つみ

とくどう

れなり。たとい根鈍なれども、罪なければ得道なることこ

すりはんどくとう

われ

しゆじよう

こん

どん

れあり。須利槃特等これなり。我ら衆生は、根の鈍なるこ

須利槃特

過

もの色

形

弁

と、すりはんどくにもすぎ、物のいろかたちをわきまえざ

ようもく

とんじんち

厚

じゅうあく

ること、羊目のごとし。貪・瞋・癡きわめてあつく、十悪は

ひび

犯

ごぎやく

ごぎやく

に

つみ

日々におかし、五逆をばおかさざれども、五逆に似たる罪、

ひび

また日々におかす。

じゅうあくごぎやく

過

ほうぼう

ひと

また十悪五逆にすぎたる謗法は人ごとにこれあり。させ

ことば

ほけきよう

ぼう

ひと

少

ひと

る語をもつて法華経を謗する人はすくなけれども、人ごと

ほけきよう

用

用

ねんぶつ

に法華経をばもちいず。またもちいたるようなれども、念仏

とう

しんじん

深

しんじん

もの

ほけきよう

等のように信心ふかからず。信心ふかき者も、法華経の

敵

責

だいでん

ほけきよう

せんまんぶ

かたきをばせめず。いかなる大善をつくり、法華経を千万部

よ　しよしや　いちねんさんぜん　かんどう　え　ひと　ほけきよう

読み書写し、一念三千の観道を得たる人なりとも、法華經の

敵　責　とくどう　有　難　ちよう

かたきをだにもせめざれば得道ありがたし。たとえば、朝

仕　ひと　じゅうねんにじゅうねん　ほうこう　くん　かたき　知

につかうる人の、十年二十年の奉公あれども、君の敵をし

そう　わたくし　怨　ほうこうみな失　かえ

りながら奏もせず、私にもあだまずば、奉公皆うせて、還

科　おこな　とうせい　ひとびと　ほうぼう　もの　知

つてとがに行われんがごとし。当世の人々は謗法の者とし

に

ろしめすべしへこれ二〇。

ほとけにゆうめつ　つぎ　ひ　せんねん　しょうほう　もう　じかい　ひと

仏入滅の次の日より千年をば正法と申して、持戒の人

おお　とくどう　ひと　しょうほうせんねん　のち　ぞうほうせんねん

多く、得道の人これあり。正法千年の後は像法千年なり。

はい　もの　おお　とくどう　ぞうほうせんねん　のち　まっぼうまんねん

破戒の者は多く、得道すくなし。像法千年の後は末法万年な

じかい 破戒もなし、破戒もなし、無戒の者のみ国に充滿せん。

じよくせ 乱 清世と申してすめ

よ 曲 世には、直繩のまがれる木をけずらするようにな、非をす

ぜ ちよくじよう 削 是を用いるなり。正像より五濁ようよういできたりて、

まつぼう そちら 盛 末法になり候えば五濁さかりに過ぎて、大風の大波をおこ

岸 打 してきしをうつのみならず、また波と波とをうつなり。

けんじよく もう しょうぞう 漸 見濁と申すは、正像ようようすぎぬれば、わずかの邪法の

ひと 伝 破 一つをつたえて無量の正法をやぶり、世間の罪にて悪道に

墮 者 ぶつぼう あくどう おお 一つをつたえて無量の正法をやぶり、世間の罪にて悪道に

見  
みえはんべり。

とうせい しょうぞうにせんねん 過 まっぼう い  
しかるに、当世は、正像二千年すぎて末法に入つて

にひやくよねん けんじよく 盛

二百余年、見濁さかりにして、悪より善根にて多く悪道

お じこく あく ぐち ひと あく 知 従

に墮つべき時刻なり。悪は、愚癡の人も悪とすれば、したが

へん ひ みず 消

わぬ辺もあり。火を水をもつてけすがごとし。善は、ただ善

おも しょうぜん っ だいあく お

と思うほどに、小善に付いて大悪の起こることをしらず。

でんぎよう じかくとう しょうせき 廢 荒

ゆえに伝教・慈覚等の聖跡あり、すたれ、あばるれども、

ねんぶつどう 言 捨 置 傍

「念仏堂にあらず」といいてすておきて、そのかたわらに

新 ねんぶつどう きしん でんぱた 取

あたらしく念仏堂をつくり、かの寄進の田畠をとりて

ねんぶつどう

寄

ぞうほうけつぎきよう

もん

念仏堂によす。これらは、像法決疑經の文のごとくならば、

くどく

み

知

ぜん

功德すくなしと見えはんべり。これらをもちてしるべし。善

だいぜん

破

しょうぜん

あくどう

お

なれども、大善をやぶる小善は、惡道に墮つるなるべし。

いま

よ

まつぼう

初

しょうじようきよう

き

ごんだいじようきよう

今の世は末法のはじめなり。小乗經の機、權大乘經

き

失 果

じつだいじようきよう

き

しょうせん

の機、みなうせはてて、ただ実大乘經の機のみあり。小船

たいせき

載

あくにん

ぐしや

たいせき

しょうじようきよう

には大石をのせず。惡人・愚者は大石のごとし。小乗經

ごんだいじようきよう

ねんぶつどう

しょうせん

だいあくそう

とうじとう

ならびに權大乘經・念仏等は小船なり。大惡瘡の湯治等

やまいだい

しょうじ

まつだいじよくせ

われ

ねんぶつ

は、病大なれば小治およばず。末代濁世の我らには、念仏

とう

ふゆ

た

つく

とき

合

等は、たとえば、冬、田を作るがごとし。時があわざるな

りへこれ三。 さん

くに 知 国をしるべし。 くに したが 国に随つて人の心不定なり。 ひと こころふじよう

国をしるべし。 こころなん 国に随つて人の心不定なり。 わいほく 移 たとえば、 こころ 枳 江南の橘の淮北にうつされてからたちとなる。 こころ 心なき

江南の橘の淮北にうつされてからたちとなる。 そうもく 所 心なき

草木すらところによる。 こころ まして心あらんもの、何ぞ所に

よらざらん。

されば、 げんじようさんぞう 玄奘三蔵の西域と申す文に天竺の国々を多く記 さいいき もう ふみ てんじく くにぐに おお しる

したるに、 くに なら 国の習いとして、 ふこよう くに 不孝なる国もあり、 こよう こころ 孝の心あ

る国もあり。 くに しんに 盛 瞋恚のさかなる国もあり、 くに ぐち おお くに 愚癡の多き国も

あり。 いっこよう しょうじよう もち くに 一向に小乗を用いる国もあり、 いっこうだいじよう もち 一向大乘を用いる

くに だいしやうけんがく くに み はべ いっこう

国もあり、大小兼学する国もありと見え侍り。また一向に

せつしやう くに いっこう ちゆうとう くに こく おお くに ぞくとう

殺生の国、一向に偷盗の国、また穀の多き国、また粟等の

おお くに ふじやう

多き国、不定なり。

にほんこく おし なら しやうじ はな

そもそも日本国はいかなる教えを習つてか生死を離るべ

くに かんが ほけきやう い によらいめつ のち

き国ぞと勘えたるに、法華経に云わく「如来滅して後にお

えんぶだい うち ひろ る ふ だんぜつ

いて、閻浮提の内に、広く流布せしめて、断絶せざらしめ

とううんぬん もん こころ ほけきやう なんえんぶだい ひと

ん」等云々。この文の心は、法華経は南閻浮提の人のため

うえん きやう みろくぼさつ い とうほう しやうこく あ

の有縁の経なり。弥勒菩薩云わく「東方に小国有り。た

だい き あ とううんぬん ろん もん えんぶだい

だ大機のみ有り」等云々。この論の文のごときは、閻浮提の

うち ひがし しょうこく だいじょうきよう き

じょうこう しる

内にも、東の小国に大乘経の機あるか。肇公、記して

い ふみ とうほく しょうこく うえん とううんぬん ほけきよう

云わく「この典、東北の小国に有縁なり」等云々。法華経

とうほく くに えん 書 あんねんかしようい

わ

は東北の国に縁ありとかかれたり。安然和尚云わく「我が

にほんこく みなだいじよう しん とううんぬん えしん いちじょうようけつ い

日本国には皆大乘を信ず」等云々。恵心、一乗要決に云わ

にほんいつしゆう えんきじゆんいち とううんぬん

く「日本一州、円機純一なり」等云々。

しやかによらい みろくぼさつ しゆりやそまさんぞう らじゆうさんぞう ぞうじよう

釈迦如来・弥勒菩薩・須梨耶蘇摩三蔵・羅什三蔵・僧肇

ほつし あんねんかしよう えしんのせんとくとう こころ にほんこく もつぱ

法師・安然和尚・恵心先徳等の心ならば、日本国は純ら

ほけきよう き いっくいちげ ぎよう かなら とくどう

に法華経の機なり。一句一偈なりとも行ぜば、必ず得道な

うえん ほう ゆえ 鉄 じしやく

るべし。有縁の法なるが故なり。たとえば、くろがねを磁石

吸

ほうしよ みず

招

似

ねんぶつとう

よぜん

のすうがごとし。方諸の水をまねくににたり。念仏等の余善

むえん くに

じしやく

鉄

吸

ほうしよ

みず

招

は無縁の国なり。磁石のかねをすわず、方諸の水をまねか

ゆえ

あんねん

しやく

い

じつじよう

ざるがごとし。故に、安然、釈して云わく「もし実乗に

おそ

じた

あざむ

とううんぬん

しやく こころ

あらずんば、恐らくは自他を欺かん」等云々。この釈の心

にほんこく

ひと

ほけきよう

ほう

授

者

わ み

は、日本国の人に法華經にてなき法をさずくるもの、我が身

欺

ひと

もの み

ほう

をもあざむき、人をもあざむく者と見えたり。されば、法は

かなら

くに

鑑

ひろ

か くに

ほう

必ず国をかんがみて弘むべし。彼の国によりし法なれば

かなら

くに

おも

し

必ずこの国にもよかるべしとは思ふべからず（これ四）。

ぶつぼうる ふ

くに

ぜんご

かんが

ぶつぼう

また、仏法流布の国においても前後を勘うべし。仏法を

ひろ　　なら　　かなら　　前　　ひろ　　ほう　　よう　　し  
弘むる習い、必ずさきに弘まりける法の様を知るべきなり。  
れい　　びようにん　　くすり　　与　　ふく　　くすり  
例せば、病人に薬をあたらうるには、さきに服したる薬の  
よう　　し　　くすり　　くすり　　行　　あ　　争　　ひと  
様を知るべし。薬と薬とがゆき合つてあらそいをなし、人  
損　　ぶつぼう　　ぶつぼう　　行　　あ　　争  
をそんずることあり。仏法と仏法とがゆき合つてあらそい  
　　ひと　　そん　　げどう　　ほうひむ  
をなして、人を損ずることのあるなり。さきに外道の法弘ま  
　　くに　　ぶつぼう　　破　　ほとけ　　いんど  
れる国ならば、仏法をもつてこれをやぶるべし。仏の印度  
出　　げどう　　破　　摩　　騰　　迦　　竺　　法　　蘭　　しんたん　　きた  
にいでて外道をやぶり、まとうが・じくほうらんの震旦に来  
　　どうし　　責　　じようぐうたいしわこく　　う　　もりや　　斬  
つて道士をせめ、上宮太子和国に生まれて守屋をきりしが  
ごとし。

ぶつきよう

しようじよう

ひろ

くに

だいじようきよう

仏教においても、小乗の弘まれる国をば、大乘経を

破

むじやくぼさつ

せしん

しようじよう

もつてやぶるべし。無著菩薩の世親の小乗をやぶりしが

ごんだいじよう

ひろ

くに

じつだいじよう

ごとし。権大乘の弘まれる国をば、実大乘をもつてこれ

てんだいちしやだいし

なんさんほくしち

をやぶるべし。天台智者大師の南三北七をやぶりしがごと

にほんこく

てんだい

しんごん

にしゅう

広

いま

し。しかるに、日本国は、天台・真言の二宗のひろまりて今

しひやくよさい

びく

びくに

優

婆

塞

優

婆

夷

し

しゆ

みな

に四百余歳、比丘・比丘尼・うばそく・うばいの四衆、皆、

ほけきよう

き

さだ

ぜんにん

あくにん

うち

むち

みな

ごじつてんでん

法華経の機と定まりぬ。善人・悪人、有智・無智、皆、五十展転

くどく

具

こんろんざん

いし

ほうらいさん

どく

の功德をそなう。たとえば、崑崙山に石なく、蓬萊山に毒な

きがごとし。

ごじゅうよねん

ほうねん

だいほうぼう

もの出

しかるを、この五十余年に、法然という大謗法の者いで

来

いつさいしゅじょう

賺

たま

に

いし

たま

きたりて、一切衆生をすかして、珠に似たる石をもつて珠

な

いし

取

しかん

ご

い

がりやく

を投げさせ、石をとらせたるなり。止観の五に云わく「瓦礫

たつと

みょうじゅ

もう

いつさいしゅじょう

を貴んで明珠なりとす」と申すはこれなり。一切衆生、

いし

握

たま

思

ねんぶつ

もう

ほけきよう

捨

石をにぎりて珠とおもう。念仏を申して法華經をすてたる、

もう

かえ

腹

立

ほけきよう

これなり。このことをば申せば、還つてはらをたち、法華經

ぎょうじや

罵

殊

むけん

ごう

増

ご

の行者をのりて、ことに無間の業をますなりへこれ五。

殿

義

聞

ねんぶつ

捨

ほけきよう

ただし、とのはこのぎをきこしめして、念仏をすて法華經

たま

さだ

ねんぶつしや

にならせ給いてはべりしが、定めてかえりて念仏者にぞな

たま

ほけきよう

ねんぶつしゃ

たま

らせ給いてはべるらん。法華經をすてて念仏者とならせ給

みね いし たに

転

そら あめ

ち 落

思

わんは、峰の石の谷へころび、空の雨の地におつるとおぼせ。

だい あびじごくうたが

だい ふうけちえん

もの さんぜんじんてんこう

くおん

大阿鼻地獄疑いなし。大通結縁の者の三千塵点劫を、久遠

げしゆ

もの ごひやくじんてん

へ

だいあくちしき

ほけきよう

下種の者の五百塵点を経しこと、大悪知識にあいて法華經

捨

ねんぶつとう

ごんきよう

移

ゆえ

いつけ

ひとびと

をすてて、念仏等の權教にうつりし故なり。一家の人々、

ねんぶつしゃ

そうら

ねんぶつ

念仏者にてましましげに候いしかば、さだめて念仏をぞ

勸

たま

そうろう

わ しん

すすめまいらせ給い候らん。我が信じたることなればそ

どうり

そうら

あくま

ほうねん

いちるい

誑

れも道理にては候えども、悪魔の法然が一類にたぼらかさ

ひとびと

思

だいしんじん

お

おんもち

れたる人々なりとおぼして、大信心を起こし、御用いある

べからず。大悪魔は貴き僧となり、父母・兄弟等につき

ひと ごせ

障

もう

ほけきよう

捨

て、人の後世をばさうるなり。いかに申すとも、法華經をす

謀

そうら

おんもち

てよとたばかりげに候わんをば、御用いあるべからず。

ご 景 迹

ねんぶつ

まこと

おうじよう

まず御きようざくあるべし。念仏、実に往生すべき

しようもん 強

じゆうにねん

あいだ

ねんぶつしや

むけんじごく

証文つよくば、この十二年が間、「念仏者、無間地獄」と

もう

もう

出

詰

申すをば、いかなるところへ申しいだしてもつめずして

そうろう

弱

ほうねん

ぜんどうとう

書

候べきか。よくよくゆわきことなり。法然・善導等がかき

置

そうろう

ほうもん

にちれん

じゆうしち

はち

とき

知

おきて候ほどの法門は、日蓮らは十七・八の時よりしり

そうら

頃

ひと

もう

過

けつく

て候いき。このごろの人の申すこと、これにすぎず。結句

ほうもん

敵

寄

戦

そうろう

は法門はかなわずして、よせてたたかいにし候なり。

ねんぶつしや

すうせんまん

方

人

おお

そうろう

にちれん

いちにん

念仏者は数千万、かとうど多く候なり。日蓮はただ一人、

方 人

いちにん

いま

生

そうろう

かとうどは一人もこれなし。今までもいきて候は

不可思議

ふかしぎなり。

ことし

じゅういちがつじゅういちにち

あわのくにとうじよう

まつばら

もう

おおじ

今年も十一月十一日、安房国東条の松原と申す大路に

さるとりのとき

すうひやくにん

ねんぶつとう

待

懸

そうら

して、申酉時、数百人の念仏等にまちかけられ候いて、

にちれん

いちにん

じゅうにん

よう

合

日蓮はただ一人、十人ばかり、ものの要にあうものはわず

さん

しにん

射

矢

降

雨

打

太刀

かに三・四人なり。いるやはふるあめのごとし、うつたちは

稲 妻

でし いちにん

とうぎ

打

取

ににん

いなずまのごとし。弟子一人は当座にうちとられ、二人は

だいじ 手

そうろう

じしん

斬

う

けつく

そうら

大事のてにて候。自身もきられ打たれ、結句にて候いし

そうら

打 漏

生

ほどに、いかが候いけん、うちもらされていまままでいき

ほけきよう

しんじん

勝

そうら

だいし

まき

はべり。いよいよ法華經こそ信心まさり候え。第四の卷に

い

きよう

によらい

げん

いま

おんしつおお

云わく「しかもこの経は、如来の現に在すすらな

めつど

のち

だいご

まき

い

いっさいせけん

し。いわんや滅度して後をや」。第五の卷に云わく「一切世間

あだおお

しん

がた

とううんぬん

にほんこく

ほけきよう 読

がく

に怨多くして信じ難し」等云々。日本国に、法華經よみ学す

ひと

おお

ひと

妻

狙

盗

とう

う

張

る人これ多し。人のめをねらい、ぬすみ等にて打ちはらる

ひと

おお

ほけきよう

ゆえ

過

ひと

いちにん

る人は多けれども、法華經の故にあやまたるる人は一人も

にほんこく

じきようしや

きようもん

合

なし。されば、日本国の持經者は、いまだこの經文にはあ

たま

にちれんいちにん

読

われ

しんみよう

あい

わせ給わず。ただ日蓮一人こそよみはべれ。「我は身命を愛

むじようどう

お

にちれん

せず、ただ無上道を惜しむのみ」、これなり。されば、日蓮

にほんだいいち

ほけきよう

ぎようじや

は日本第一の法華經の行者なり。

先

立

たま

ぼんてん

たいしやく

しだいてんのう

えんま

もしさきにたたせ給わば、梵天・帝釈・四大天王・閻魔

だいおうとう

もう

たも

にほんだいいち

ほけきよう

ぎようじや

大王等にも申させ給うべし。「日本第一の法華經の行者・

にちれんぼう

でし

名乗

たま

芳

心

日蓮房の弟子なり」となひらせ給え。よもほうしんなきこ

そうら

いちど

ねんぶつ

いちど

ほけきよう

唱

とは候わじ。ただし、一度は念仏、一度は法華經となえつ。

にしん

ひと

き

憚

そうら

二心ましまし、人の聞きにはばかりなんどだにも候わば、

にちれん

でし

もう

おんもち

そうら

のち

恨

よも、「日蓮が弟子」と申すとも御用い候わじ。後にうらみ

たも

させ給うな。ただし、また法華経は今生のいのりともなり

そうろう

候なれば、もしやとしていきさせ給い候わば、あわれ、

疾

げんざん

自

もう

開

ことば

文

とくとく見参して、みずから申しひらかばや。語はふみに

尽

文

こころ

尽

難

そうら

止

そうら

つくさず、ふみは心をつくしがたく候えば、とどめ候い

きようきようきんげん

ぬ。恐々謹言。

ぶんえいがんねんじゆうにがつじゆうさんにち

にちれん

かおう

文永元年十二月十三日

日蓮

花押

南

条

しちろうどの

なんじょうの七郎殿